

【実施報告】

第8回オンラインセミナー 「多様性を活力とした持続可能なまちづくりー外国系市民が活躍するドイツ・エアランゲン市のまちづくりに対する価値観から学ぶー」を開催

ドイツ・エアランゲン市在住の高松平藏氏をお招きし、オンラインセミナーを開催した。本セミナーの内容について、以下のとおり報告する。

1 概要

○日時：2021 年 10 月 7 日（木）16 時 30 分から 17 時 30 分まで（日本時間）

○当日参加者数：113 名（申込者数：176 名）

○プログラム：

①開会挨拶・講師紹介（16:30～16:35）

②講演（16:35～17:15）

③質疑応答（17:15～17:30）

2 講演内容

はじめに

- ・ドイツの地域社会を見ると、健全なデモクラシーを守るための取組が活発であることから、彼の国を「デモクラシークラブ」と理解できるだろう。多文化共生の観点からは、ドイツで暮す外国系市民の方には「デモクラシークラブ」に入ってほしいと考えており、このための理論と実践を行っている。

ドイツにおける外国系市民の割合と分類

- ・ドイツ全体では約4分の1が外国系市民(移民背景を持つ人)である。
- ・外国系市民を思考(伝統的、近代的、新方向)と社会的状況(低い、中程度、高い)により分類した調査によれば、ドイツではそれぞれ比較的まんべんなくいる。

伝統的な思考を持ち、社会的階層が低い人は、多文化共生が難しいと思われる。

この人たちに何らかのアプローチをしないと、並行社会になる可能性が高くなってしまふ。オープンな考え方をもち、社会的階層が高い人は、適応性が高くどのような土地でもアクティブに生活できる資質を持っている。また、社会的階層が高くなくても、オープンな考え方を持った人は、現地の人たちとコラボレーションするなどのかたちで新しい文化を創っていく可能性がある。

バイエルン州エアランゲン市における取組

- ・ウェルカムセット

エアランゲン市に初めて来た人は、ウェルカムデスクにて、ウェルカムセットを受け取る。

この中には、街にどういう劇場や NPO があるか、ごみの分別はどのようにするかなど、生活に必要な情報や、生活の質を支えるために必要な案内を入れている。

外国系市民がどのような情報が欲しいか、あるいは外国で居住経験のある日本人から体験をヒアリングすることで、日本でもウェルカムセットの配布はできると考えられる。

- ・ 語学コース

難民の方には語学コースを提供しているが、元々生涯学習機関で行っているドイツ語コースを活用して開催している。

- ・ 外国人・統合諮問委員会

1970 年代に作られたもので、他の自治体でも散見される。直接政治的なことを決める権限はない。委員は外国人が投票により決めており、外国人議会のような役割を果たしており、自治体の外国人の公式の代表である。この委員会を通じて、どのようなことに困っているかという意見が吸い上げられ、間接的ではあるが外国人の立場から行政や地方政治に働きかけることができる。

- ・ インテグレーション会議

2009 年から毎年行われている。外国系市民、行政、政治家、商工会議所、宗教のグループ、関心のある市民などを交え、毎年、特定のテーマに沿って会議が行われる。

- ・ 書籍「われわれはエアランゲン」

エアランゲン市が 2010 年に出版。20 か国、30 人の外国系市民がインタビューを受け、なぜエアランゲンに来たのか、どういう生活をしているかというストーリーが書かれている。出版をしたことにより、取材を受けた人たちのネットワークづくりもできる。また、ドイツの都市は歴史を大切にしているが、これはつまり日々街でおきることを記録し続けているということである。アクティブな外国人の存在が本によって「記録」されるかたちで、都市のプロフィールづくりとして街の歴史が蓄積・研究される。この蓄積されたものは、ミュージアムでの展示やメディアに展開するなどの取組にも活用されうる。

- ・ 展覧会「私のインターカルチャー・エアランゲン」(2014 年)

学校と市営のミュージアムが共同で開催。エアランゲン市内でレストランを営む外国系市民に学生がインタビューをしたり、移民背景を持つ学生であれば、家族にインタビューをしたりして、異文化の理解を深めた。展覧会のインタビューでは、「国を追われたときに何を持っていますか」という具体的な質問もされた。

【参考記事】 ミュージアムで多文化共生を考える：文化で都市の課題を提示

<https://www.interlocal.org/20140508-2/>

- ・多様性のためのコミュニケーション「ピクニックパーティ」

歩行者ゾーンになっている街の中心地で、移民背景を持つ人が、長いテーブルを出して、自由に誰でも食事がとれるようにピクニックを繰り広げた。知り合うきっかけをつくるために開催されたもの。

- ・BIG プロジェクト

エアランゲン大学の研究で、社会的弱者の女性には運動の機会が少ないことがわかり、社会的弱者のためのスポーツプログラムとしての「BIG プロジェクト（"BIG"は、独語で『健康の投資としての運動』を略したもの）」が2005年から始まった。行政とNPOであるスポーツクラブと生涯学習機関が連携。イスラム系の女性に対しては、女性のトレーナーが指導。プログラムは、参加者同士での話し合いをベースにすすめられている。

- ・写真展「頭の布のアート」

2019年に高松氏が生涯学習機関のカフェで開催。ヨーロッパ社会の中では、イスラム系の女性は抑圧されているというイメージを少なからず持たれている。その象徴がヒジャブ（スカーフ）であるが、「偏見なしで、一人の人間として見るべき」という問題提起として写真展を開催した。

都市発展と外国系市民

- ・リチャード・フロリダ氏は、著書「クリエイティブ・クラス」において、「寛容」「技術」「才能」がクリエイティブ経済に必要な要素であると理論づけている。その中で、「寛容」を支えるのは、多様な価値観を持つゲイ、外国人、芸術家であるとされている。

ドイツでもフロリダ氏の理論に従って、都市のクリエイティビティに関して調査を行ったところ、エアランゲン市は、大学都市で外国人の研究者も多く、クリエイティブな都市としてトップクラスであるとして評価を受けたことがある。

- ・職住近接が前提となっているドイツでは企業が都市の立地条件を高めることに注力しており、地元での異文化理解のための文化プログラム、スポーツや学校のプログラムへのスポンサリングを行っている。例えば、エアランゲン市では、毎年トルコの映画祭に企業が寄付を行うが、このような取り組みにより、異文化への理解と寛容を持った市民(従業員)が増え、結果として事業拠点の信頼性を高めている。

- ・多文化共生において、外見や言語の違いを意識しないことは難しいのは当然のことだ。しかし意図的に知識ベースで学習することや、外国人との接触が増え、経験を重ねることで、人種や国籍ではなく、人間性を見るようになる。こういった機会を作ることが地域社会で

求められる。

デモクラシークラブとしてのドイツ

- ・デモクラシーには完成形があるわけではない。ドイツの場合、ヒトラーにより合法的に民主主義が崩されてしまった歴史は、デモクラシーに弱いところがあることを示している。現在もデモクラシーの脆弱性を排除するための取組を続けている。
- ・ドイツでは地域社会の細部にまでデモクラシーの保護・強化のための取組が行われている。例えば図書館、劇場などもそうで、文化とデモクラシーは密接に関わっている。
- ・投票をすることだけがデモクラシーではなく、投票に至るためのプロセス(情報リテラシー、意見形成)が重要であり、ドイツでは、このプロセスに関わる教育を重視している。
- ・ドイツでは、多文化共生を「統合」により実現しようとしている。原理的には同化政策であるが、「デモクラシークラブ」としてのドイツのメンバーに入ってほしいと考えている。そのために、例えば、ドイツ語を習得する中でデモクラシーの価値を学ぶこと、また、前出の BIG プロジェクトであれば、イスラム系の女性たちが自分たちでプログラムの中身を決めていく中で、デモクラシーの価値にフィットしていくよう、プロジェクトが設計されている。

SDGs とデモクラシーの関係性

- ・SDG s の前文では「人間の尊厳」が触れられており、SDG s は「人間の尊厳」を実現するための環境づくりと言える。
- ・今のヨーロッパは、SDG s で目標とされている課題に対してすでに取り組んできた経緯があるため、SDG s は再帰的な目標となっており、ドイツでは政治家や行政職員を除けばSDG s に対する認知度は低い。
- ・ひとりひとりに可処分時間があり、プライベートの時間を社会参加や政治参加に割くことができこそ、SDG s の17の目標である「人間の尊厳」が実現できる。

質疑応答

【Q1】ドイツでは地域の図書館や劇場において、デモクラシーを守るための取組が行われているということだが、図書館では具体的にどのような取り組みがあるか？

【A1】図書館単独の取組はあまりないが、多文化共生については各国の言語による朗読の日がある。例えば、トルコの絵本を朗読する日など。

(補足) 図書館そのものは「情報へのアクセスを通して意見を形成」する生きたデ

モクラシーの場と位置づけられている。

【Q2】多様なバックグラウンドを持つ人をサポートしている NPO の活動状況は？

【A2】外国人・統合諮問委員会の役割が大きい。外国人にとって、行政と関わることは、ハードルが高いが、スポーツクラブや・統合諮問委員会を通じて地域に入っていくことで、行政に関わるきっかけづくりにもなっている。

【Q3】外国人・統合諮問委員会の成果は？

【A3】議論を共有すること、参加者のネットワークづくりが一番の成果である。弱い繋がりであっても人脈を生かすことでプロジェクトを始めるきっかけになることがあるため、外国人諮問会議は、その地ならしになっていると考えられる。

【Q4】行政・市民・企業の連携においてコーディネーターの役割を果たしている組織はあるか？

【A4】具体的なものとしては、インテグレーション会議がコーディネーター的な役割を果たしている。また、基本的に NPO やさまざまな組織をつなぐ役割が行政にある。

【Q5】プレゼンテーション資料の外国人のカテゴリーの中で伝統的という指標があったが、保守的と同じ意味か？

【A5】宗教的な考え方がバックグラウンドにあり、保守的であるということを意味している。

【Q6】ドイツでは、どのような気候変動対策を実施しているのか？

【A6】二酸化炭素の排出量に対するモニタリングをしっかりとっており、公共交通や自転車道の充実などの政策に反映させている。また、ドイツでは、電気、ガスなどの公共インフラを整備・運営する自治体所有の公益企業であるシュタットベルケが多く存在し、行政と連携して気候変動に取り組んでいる。

【Q7】ドイツにおいても人口減少が見込まれているということだが、どのように地方の持続可能性を確保しようとしているのか？

【A7】ドイツでは、全体的に人口減少を外国系市民の方が補っている。人口が4,000人くらいの村がエアランゲン市にもあるが、外国系市民を除くと、平均年齢が上がってしまう。

【Q8】文化とデモクラシーが密接に設計されているということだが、具体的にはどういうことか？

【A8】デモクラシーには、自分の意見を表明し、政治に反映させていくという一連の動きがある。日本では、自分の意見を形成する教育がほとんど行われていないが、ドイツの教育では、発言をすることが成績に繋がる。発言するにあたっては、物事を批判的にみたり、情報を収集したりする能力が問われる。芸術作品や劇場での上演は、現代の社会を批判的に写し出すなどいろんな視点を提供しており、この点においてデモクラシーと紐づけられている。

【Q9】高松さんが考える生活の質が高い街とは？

【A9】ハード面でいえば、街にどれだけリラックスできる公共空間があるか、また、ソフト面では、多くの人が可処分時間を持てる仕組みがあるかどうかになる。可処分時間について言えば、正しい労働のあり方が常に問われる社会や政治が必要になってくる。日本の働き方改革が可処分時間の長さに繋がれば、生活の質に目を向ける余白が生まれるのではないかと考える。